

I 定点把握感染症
(性感染症を除く)

定点把握感染症（性感染症を除く）

1. 平成 26 年のまとめ

平成 26 年の大阪府感染症発生動向調査事業の定点把握感染症（性感染症を除く）を概観して特徴的な事象について概要を述べたい。小児科定点からの報告のうち、定点あたり年平均の週間報告数で最も多かったのは例年通り感染性胃腸炎で、次が A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎で、以下、水痘、ヘルパンギーナ、RS ウイルス感染症、咽頭結膜熱、手足口病の順であった（第 33 報表 P 20 感染症別・ブロック別報告状況）。

最近 6 年間の平均報告数のうち、比較的大きな流行となった年を除く複数年の平均報告数（以下、平年値とする）（ベースライン）と比較し、本年の各疾患の流行の増減を評価する。平年より 20%以上報告数が増加した疾患は、咽頭結膜熱（平均報告数 0.56、平年値 0.32）、ヘルパンギーナ（平均報告数 0.94、平年値 0.69）、A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎（平均報告数 2.01、平年値 1.56）で、平年値よりそれぞれ 75%、36%、29%増加した。逆に 20%以上報告数が減少した疾患は、手足口病（平均報告数 0.22、平年値 0.86）伝染性紅斑（平均報告数 0.07、平年値 0.23）、流行性耳下腺炎（平均報告数 0.17、平年値 0.64）、水痘（平均報告数 0.94、平年値 1.31）で、それぞれ平年値の 73%、72%、70%の大幅な減少が認められ、水痘は 28%減少した。他の把握疾患は平年と同様の流行であった。感染性胃腸炎の年平均報告数は 6.67 で、平年値 6.24 と比較すると 6.9%の微増であり、RS ウイルス感染症は 0.83 で平成 24,25 年の 0.81,0.78 と同様の報告数であった。迅速診断検査が約 3 年前から外来で使用されてきたことを考慮すると、これらの平均報告数 0.81 が平年値となる可能性が考えられる（平成 22 年までの 5 年間の平均値は 0.57 である）。

インフルエンザの年平均定点報告数は 6.01 で、過去 6 年間（例外的であった H21,22 年を除く）の平年値 3.40 と比較し 1.8 倍の増加であった。基幹定点報告ではマイコプラズマ肺炎の定点報告数は 0.12 で、流行年を除く過去 5 年の平年値 0.86 の 14%と小さい流行となった。眼科定点および他の基幹定点対象疾患は例年とほぼ同様の報告数であった。平成 25 年 42 週よりロタウイルス胃腸炎が新たに基幹定点対象疾患に追加され、今年初めて 1 年間全国調査がなされたが、大阪府での週平均定点報告数は 0.26 であった。

インフルエンザの定点医療機関数は、事業年内に多少の変動はあるが、内科と小児科合せて 309 定点であり、昨年より 1 増加した。小児科定点数は 201 と 2 増加し、眼科定点数 52、基幹定点数 18 は昨年と同数であった。（P22 表）

（文責：高橋）

1) 平成26年に注目された感染症

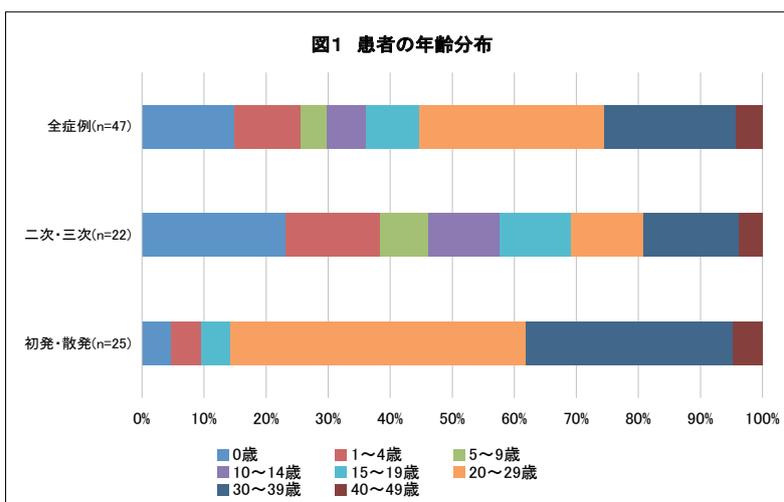
[麻しん]

○「大阪府における2014年の麻疹の発生動向のまとめ」

感染症発生動向調査システムに麻疹と報告された46例に、府内集団発生事例で感染者の居住地が他府県であった1例を加えた計47例のまとめ。

1、患者の発生状況と年齢分布

全患者47例をさらに散発・初発群(n=25)、二次・三次感染群(n=22)の2群に分け、それぞれの群の年齢分布を図1に示した。全患者の平均年齢は19.7歳±14.0歳、中央値は22.5歳であった。20～29歳が14例(30%)と最も多く、次いで30～39歳が10例(21%)、0歳児が7例(15%)の順であった。20～39歳の青年層成人が24例(51%)と半数以上を占めていた。



散発・初発群では20～29歳が10例(40%)と最も多く、一方で、二次・三次感染群は0歳児が6例(27%)と最も多かった。両群間の平均年齢について比較検討を行ったところ、境界域の有意差が認められた(散発・初発群:23.8±13.0歳、二次・三次感染群:15.6±14.5歳、p=0.048)。

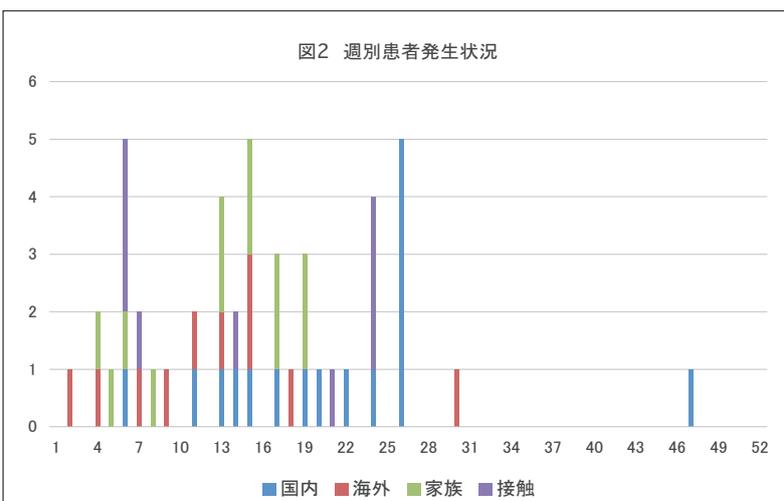
2、週別患者発生状況とウイルス遺伝子検出状況(図2)

第2週から30週にかけて1～5例/週の報告が続き、47週の1例を最後に終息した。

47例中ウイルス遺伝子型が判別した41例の内訳はB3型(29例)、H1型(9例)、D8型(3例)であった。

3、推定感染経路

47例のうち感染源不明の国内感染(海外渡航歴なし)が最多の



16例(34%)、次いで家族内感染12例(26%)、海外渡航関連事例が10例(21%)、医療機関や学校・

職場での接触感染が10例(19%)であった。海外渡航先はフィリピンが最多で7例、中国、インドネシア、ベトナムが各々1例ずつであった。

4、施設内での集団発生の状況

1) フィリピン人の親を持つ4歳男児(接種歴なし)が、フィリピンから帰国後発症し、受診した医療機関で同室にいた感受性者が発症した。

2) 感染経路不明(渡航歴なし)の22歳の男性が発端者となり、職場で複数の患者が出た。

5、麻疹含有ワクチン接種歴

全症例47例中、接種歴なし25例(53%)、不明14例(30%)1回接種7例(15%)2回接種1例(2%)であった。接種歴なし・不明を合わせると39例、83%を占めていた。

6、麻疹ウイルス遺伝子検出状況

47例中遺伝子型が判別した41例は、すべて海外由来株であった。内訳はB3型が29例、H1型が9例、D8型が3例であった。流行の前半はB3がほとんどを占めていたが、後半は主にH1が検出された。

7、発症から届出までの日数

全患者47例の発症から届け出までに要した日数の平均は 7.2 ± 4.3 日、中央値は5日であった。

15歳以上群は15歳未満群に比べ有意に日数が長かった。

(15歳未満群： 4.5 ± 2.8 日、15歳以上群： 8.7 ± 4.3 日、 $p=0.001$)。

8、結論

府内の麻疹を制圧するためには、「受診の遅れ」や「診断の遅れ」を最小限にし、発症からなるべく早期に届け出を行うために、患者や医療機関への麻疹に対する注意喚起が重要であると考えられる。また、麻疹含有ワクチン定期接種率の向上に加え、成人感受性者、特に渡航の機会や外国人との接触の可能性のある者、日本に在住する外国人児童に対するcatch-upワクチンが効果的であると考えられる。

(文責：東野)

【デング熱】

デング熱は、アジア、中南米等の熱帯・亜熱帯地域で広く流行しており、近年、日本国内では、海外の流行地で感染した輸入症例が年間200例前後報告されてきたが、国内発生例は戦後の混乱期以後は2013年まで報告がなかった。

2014年8月26日、東京都内で感染したと考えられるデング熱症例が確認され、その後2カ月余りで162例に及ぶ国内感染例が報告された。感染推定地域は、東京都が159例(98%)で、千葉県1例、兵庫県1例、都道府県不明1例であった。なお、2014年の輸入症例は178例であった。

府内では、東京都内で感染したと考えられる国内発生例3例が9月2日に報告された。3例とも8月下旬に代々木公園を訪れており、直近の海外渡航歴は無かった。

(文責：森定)

2) 感染症別・週別患者報告状況

冬型感染症である感染性胃腸炎の年平均報告数は6.67で、平年値6.24(ベースライン)と比較すると、ほぼ同等の値であった。定点あたりの週別報告数の最高値は4月第17週の11.71であるが、例年と同様に4月と12月にほぼ同等な2峰性の流行を認めた。RSウイルス感染症の年平均報告数は0.83で、流行のパターンは昨年と同様で、1を超えた1月から減少し、6月が最も少なく、9月より再び1を超え、流行規模は昨年より大きく最高値は12月第50週の3.19であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の報告数は2.01で、平年より30%増加した。流行は例年の如く新学期開始後の初夏と冬季の2峰性を示した。定点あたり報告数は平均2前後で推移し、5月22週に最高値3.94となり、29-45週は1代で推移した。水痘の定点あたり平均報告数は0.96で、平年に比較して28%減少し、流行は例年の如く冬季と5-6月に2峰性を示した。年間を通して1前後で推移し、初秋は0.35と低く本年は1月第2週に最高値2.33となった。マイコプラズマ肺炎は平年より86%も減少し、6月と11-12月に小さい流行がみられ、最高値は6月23週、11月47週、12月49週の同じ0.41であった。

夏型感染症である手足口病の報告数は平年の24%と大幅に減少し、6月27週、0.51が夏のピークで、以後漸減し10月43週に0.12となったが、本年は例年と異なりその後増加に転じ、冬の12月50週に0.54のピークとなる流行となった。ヘルパンギーナは平年より36%増加し、最高値は29週の8.75であった。咽頭結膜熱は平年より75%増加し、例年通り5-8月に流行を認め、最高値は23週の1.25であった。流行性耳下腺炎は平年の27%となり、一年を通して0.1-0.2で推移した。最高値は6月26の0.32で夏季に小流行が認められた。伝染性紅斑は平年の30%となり、11,12月と6月に小さな流行を認めた。最高値は47,50,52週の0.16であった。

3) 感染症別・ブロック別患者報告状況

大阪府内を11ブロックに分け、各ブロックの構成市町村、定点数、人口、出生数ならびに1年間の総報告数を表(P22およびP20)に示した。感染症別に1年間でより多くの報告数が認められた地域を定点あたりの年平均報告数の多寡を多い順に下記の表に要約した。突発性発疹はブロック間で定点あたり報告数がほぼ同等であることが期待されるが、最大の中河内0.82と最小の堺市0.29では2.8倍の差が認められ例年と同様な値であった。突発性発疹の上位報告数の3ブロックは中河内、北河内、南河内であり昨年と同じである。そこで、インフルエンザと小児科定点疾患のうちの9疾患(百日咳と伝染性紅斑を除く)を合わせた10疾患の各ブロックの定点あたり報告数の上位3位についてみると、南河内、中河内、北河内は10疾患のうちそれぞれ9,7,3疾患で上位3位に含まれた。さらに、南河内は10疾患中6疾患で上位1位であり、中河内、北河内もそれぞれ2疾患で1位である。これら3ブロックは10疾患の下位3位を占める事は一度も無く、いわばこれら10疾患がよく流行する地域であると解釈されるが、非常に不自然な状況である。

逆に下位3位についてみると、三島、大阪市東部、堺市はともに10疾患のうち6疾患で下位3位に

含まれ、三島、大阪市東部はそれぞれ3疾患で最下位であり、堺市は2疾患で最下位である。これら3ブロックは1か所を除き10疾患の上位3位を占めることはなく、常に報告数は少ない。この結果は昨年と同様である。

したがって、突発性発疹の定点あたりの報告数が高い3ブロックは他の多くの対象疾患の報告数も多く、逆に、突発性発疹の報告数が低い3ブロックは他の多くの対象疾患の報告数も少ない。この事実は実に不自然であり、対象疾患の流行を正しく反映しているかは疑問が残る。各ブロックにおける突発性発疹の報告数の差の原因は複数の要因が考えられるが、第一に考えられるのが、1 定点医療機関における受診者数の差である可能性が従来より考えられており、全国的にもその可能性が指摘され、感染症研究所でも検討課題となっている。現状ではブロック間で定点あたり報告数を比較することは困難であり、報告数の補正など適切な解析が必要である。感染症研究所 感染症疫学センターにおいてもこの課題の全国的な問題点を認識しており、今後の検討課題としている。今後の対策として、突発性発疹のブロック間における報告数の差が生じる原因を解明し、その後、定点医療機関の数の再検討やブロック内での地理的位置等の検討が必要となる。

表、感染症別・ブロック別 定点あたり順位											
	インフルエンザ		RSウイルス感染症		咽頭結膜熱		A群溶レン菌咽頭炎		感染性胃腸炎		水痘
大阪市西部	9.42	南河内	1.34	南河内	0.96	中河内	2.61	南河内	10.23	南河内	1.62
南河内	9.26	大阪市西部	1.33	中河内	0.95	南河内	2.60	中河内	9.40	大阪市北部	1.45
北河内	6.69	大阪市北部	1.22	大阪市北部	0.83	堺市	2.46	大阪市泉州	8.91	中河内	1.38
大阪市北部	6.36	北河内	1.05	北河内	0.61	豊能	2.37	北河内	8.89	大阪市泉州	1.01
中河内	5.99	中河内	1.04	大阪市泉州	0.58	大阪市泉州	2.20	三島	5.93	北河内	0.97
大阪市泉州	5.94	大阪市泉州	0.74	大阪市東部	0.50	北河内	2.14	大阪市北部	5.92	堺市	0.75
堺市	5.62	大阪市南部	0.62	大阪市南部	0.46	大阪市東部	2.08	豊能	5.17	三島	0.69
大阪市東部	5.00	豊能	0.57	大阪市西部	0.35	大阪市南部	1.61	大阪市西部	4.76	大阪市東部	0.68
大阪市南部	4.95	大阪市東部	0.55	豊能	0.34	大阪市北部	1.29	大阪市南部	4.58	大阪市西部	0.67
豊能	4.63	堺市	0.53	堺市	0.33	大阪市西部	1.03	大阪市東部	3.65	大阪市南部	0.63
三島	4.07	三島	0.39	三島	0.26	三島	0.82	堺市	3.49	豊能	0.57
	手足口病		伝染性紅斑		突発性発疹		百日咳		ヘルパンギーナ		流行性耳下腺炎
南河内	0.47	北河内	0.13	中河内	0.82	大阪市西部	0.04	北河内	1.61	南河内	0.47
大阪市泉州	0.30	中河内	0.09	北河内	0.70	南河内	0.02	大阪市北部	1.54	中河内	0.29
大阪市北部	0.26	大阪市東部	0.07	南河内	0.67	中河内	0.02	中河内	1.15	大阪市西部	0.19
中河内	0.24	大阪市南部	0.07	大阪市泉州	0.60	大阪市泉州	0.02	南河内	0.90	大阪市南部	0.18
北河内	0.23	豊能	0.06	大阪市北部	0.54	三島	0.02	豊能	0.90	北河内	0.16
大阪市南部	0.19	大阪市北部	0.06	豊能	0.52	豊能	0.02	大阪市南部	0.85	大阪市北部	0.16
堺市	0.15	南河内	0.06	大阪市西部	0.48	大阪市東部	0.02	三島	0.83	大阪市泉州	0.12
豊能	0.14	堺市	0.04	大阪市南部	0.44	北河内	0.02	大阪市泉州	0.67	三島	0.11
三島	0.13	大阪市泉州	0.04	大阪市東部	0.36	大阪市北部	0.01	大阪市西部	0.65	豊能	0.07
大阪市西部	0.13	三島	0.03	三島	0.30	大阪市南部	0.01	堺市	0.45	堺市	0.07
大阪市東部	0.11	大阪市西部	0.02	堺市	0.29	堺市	0.00	大阪市東部	0.38	大阪市東部	0.06

4) 感染症別・年齢別患者報告状況

インフルエンザ定点、基幹定点からの報告を除いた小児科定点における年齢別報告数で最も多かった年齢は1歳で、次いで2歳、3歳、4歳、0歳の順であった。3歳までの報告数は、全報告数の50%と半数を占めた。以上は例年通りである。0歳において頻度の高い疾患は感染性胃腸炎、次いでRSウイルス感染症、突発性発疹であり、この3疾患で81%を占める。1歳では感染性胃腸炎、RSウイルス感染症、突発性発疹、ヘルパンギーナ、水痘、咽頭結膜熱の頻度が高い。

2歳で頻度の高い疾患は、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、水痘、A群溶連菌咽頭炎、RSウイルス感染症で、3歳では感染性胃腸炎、A群溶連菌咽頭炎、水痘、ヘルパンギーナであった。個々の感染症の最好発年齢をみると、0歳はRSウイルス感染症、百日咳が最好発年齢で、1歳は感染性胃腸炎、突発性発疹、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱、手足口病で最も高頻度である。

3歳では水痘が4歳ではA群溶連菌咽頭炎、5歳では、流行性耳下腺炎、伝染性紅斑が最も高頻度であった。この好発年齢の傾向は過去5年ほぼ同様であった。インフルエンザは6歳で最も高頻度であったが、4歳から8歳までの間では頻度に大きな差を認めなかった。眼科定点疾患の流行性角結膜炎は1-3歳、基幹定点疾患のマイコプラズマ肺炎は3-9歳が好発年齢であった。

1歳で最も報告数が多いRSウイルス感染症、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱、手足口病は母親からの移行抗体が消失後に比較的感染を受けやすい（伝播性の高い）疾患であることが推定される。一方、インフルエンザ、A群溶連菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、伝染性紅斑は4-5歳が好発年齢であり、幼稚園、保育所などでの集団生活開始後に罹患する、前者に比べ比較的伝播性の低い疾患であることが推定される。

本年もインフルエンザを除外すると、すべての年齢で感染性胃腸炎の報告が最も多く認められた。

(文責：高橋)

平成 26 年 感染症発生動向調査 カレンダー

● 調査期間は月曜日から日曜日までの1週間を単位としています。

	週	調査期間		週	調査期間		週	調査期間
1月	1週	12/30 ~ 1/5	5月	19週	5/5 ~ 5/11	9月	36週	9/1 ~ 9/7
	2週	1/6 ~ 1/12		20週	5/12 ~ 5/18		37週	9/8 ~ 9/14
	3週	1/13 ~ 1/19		21週	5/19 ~ 5/25		38週	9/15 ~ 9/21
	4週	1/20 ~ 1/26		22週	5/26 ~ 6/1		39週	9/22 ~ 9/28
	5週	1/27 ~ 2/2		23週	6/2 ~ 6/8		40週	9/29 ~ 10/5
2月	6週	2/3 ~ 2/9	6月	24週	6/9 ~ 6/15	10月	41週	10/6 ~ 10/12
	7週	2/10 ~ 2/16		25週	6/16 ~ 6/22		42週	10/13 ~ 10/19
	8週	2/17 ~ 2/23		26週	6/23 ~ 6/29		43週	10/20 ~ 10/26
	9週	2/24 ~ 3/2		27週	6/30 ~ 7/6		44週	10/27 ~ 11/2
3月	10週	3/3 ~ 3/9	7月	28週	7/7 ~ 7/13	11月	45週	11/3 ~ 11/9
	11週	3/10 ~ 3/16		29週	7/14 ~ 7/20		46週	11/10 ~ 11/16
	12週	3/17 ~ 3/23		30週	7/21 ~ 7/27		47週	11/17 ~ 11/23
	13週	3/24 ~ 3/30		31週	7/28 ~ 8/3		48週	11/24 ~ 11/30
	14週	3/31 ~ 4/6		32週	8/4 ~ 8/10		49週	12/1 ~ 12/7
4月	15週	4/7 ~ 4/13	8月	33週	8/11 ~ 8/17	12月	50週	12/8 ~ 12/14
	16週	4/14 ~ 4/20		34週	8/18 ~ 8/24		51週	12/15 ~ 12/21
	17週	4/21 ~ 4/27		35週	8/25 ~ 8/31		52週	12/22 ~ 12/28
	18週	4/28 ~ 5/4						